



ようやくあらわれた、自己批判の芽

停滞するパレスチナ映画

昨今、イランやレバノンなど中東発の映画が話題になり、興行的にも成功しているのは、嬉しい限りである。じつはパレスチナ発の映画は、それに先だってかなり早い時期から紹介されてきた。二〇〇〇年代以降も、ハーニー・アブー・アサド監督の「パラダイス・ナウ」(二〇〇五年)と「オマールの壁」(二〇一三年)が注目を浴びた。前者は当時頻発していたパレスチナの若者によるイスラエル国内での自爆、後者はイスラエルの密告者に仕立てられた若者の苦悩を扱っている。ことに前者は、パレスチナ映画の白眉といってよい作品だ。ところが後者を観たとき、わたしはかなり失望した。その理由を述べるため、すこし背景を説明したい。イスラエルとの関係上、パレスチナ映画は政治的にならざるをえず、イスラエルへの抵抗の手段として映画が製作されてきた。観客として想定されたのはいうまでもなく、パレスチナ・アラブの一般市民ではなく、パレスチナ・イスラエル問題に関心をもつ海外のひととである。初期のうちは、イスラエルの占領政策を批判するだけでじゅうぶんであり、観客もそれを求めた。しかしながら占領から七〇年以上を経て、いつまでもそれでよいのか。現在のパレスチナ自治区は、停滞している。海外か



敬虔なゼイナブ(中央)と薬物中毒のサフィア(左)。2人の掛け合いが、パレスチナ社会の暗部を浮き彫りにしてゆく(配給:アップリンク)

菅瀬 晶子  
民博 超域フィールド科学研究部

「ガザの美容室」

原題: Dégradé

2015年/パレスチナ・フランス・カタール/アラビア語/84分

監督: タルザン・ナーセル、アラブ・ナーセル

出演: ヒヤーム・アッパース、マイサ・アブドゥルハーディほか



登場する女性たち。中央のヒヤーム・アッパースは、ハリウッドの大作にも出演するパレスチナを代表する俳優の1人(配給:アップリンク)

ユダヤ人国家樹立をめざすシオニズムを掲げたユダヤ人入植者と対峙することによって、はじめてアラブ人のあいだで共有された。ところがいつしか皮肉にも、イスラエルを否定することが、パレスチナ・アラブのアイデンティティを表明する手段になってしまった。パレスチナ映画も同様である。自爆や暗殺で自己の絶望を表現しても、後に残るのは負の感情と報復の連鎖のみ。それを描いておきながら、結局すべてをイスラエルの占領のせいと結論づけた「オマールの壁」は、停滞しきった現在のパレスチナの限界をも提示している。自己批判なき練り言に満ちたパレスチナ映画に、観客はただ息苦しい思いをするだけで、もはや共感を抱けない。もし映画で現状への抵抗を示そうとするならば、パレスチナの問題を普遍性ある物語として提示する必要があるのではなからうか。それをはじめて感じることでできたのが、今回取り上げる「ガザの美容室」である。

舞台劇のように

やわらかな午後の光に包まれる美容室。二人の美容師と、女性客たちがおしゃべりを交わす。しかし美容師の一人がマフィアの一味である恋人に、電話で別れ話を切り出したことから、美容室は一転

らの援助によって流れてくるカネと利権は上流階級に独占され、自治区に閉じ込められた一般市民のほとんどは、もはや現状を打破することを放棄している。「イスラエルのせい、占領のせい」。それですべてが結論づけられてしまうのだ。パレスチナという共同体意識は、して危機に陥る。逆上した男の身勝手な行動が、ガザを支配するイスラーム主義政党ハマース政権とマフィアの抗争に発展してしまい、女性たちは停電した美容室に閉じ込められてしまうのだ。「ガザの美容室」は閉塞的なガザの状況を、政治腐敗やジェンダーギャップ(男女格差)など世界が抱える普遍的な問題に通底するものとして、舞台劇的な手法で描いてみせた。本作が既存のパレスチナ映画と一線を画しているのは、イスラエルという単語は数えるほどしか登場せず、女性たちを抑圧するのは同じパレスチナ・アラブの男たち、すなわち美容師の粗暴な恋人であり、彼が属するマフィアであり、マフィアを殲滅しようとするハマース政権、さらにはハマースと対立する自治政府である。登場する女性たちの描写も、一般的なパレスチナの女性像からは大きく逸脱している。一夜の火遊びをもくろむ離婚調停中の中年女性に、ハマースに反発するヒジャーブ姿の女性。なかでも中世演劇における道化の役割を担っている、薬物中毒の女性の毒舌ぶりは、いちいち正鶴を射いて痛快だ。女性が舵取りをすればもつとよい世の中になるはずと、彼女が客たちそれぞれに大臣の役職を割り振ってゆく場面は見ものである。しかしながら結局、非常事態に結束していたかみえる女性たちのあいだにも諍いが起こり、男性の乱入によって、つかの間の不自由で自由な楽園は終焉を迎える。救いのない物語のようではあるが、自己批判精神に満ちた本作に、わたしはかえってパレスチナ映画のあらたな表現への希望を、かすかに見いだした。